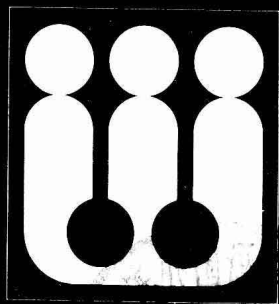


草原に輝く星

前嶋信次





前嶋信次（まえじま・しんじ）

1903（明治36）年 山梨県生まれ

東大文学部東洋史学科卒

現 在 慶応義塾大学名誉教授 文学博士

主なる著書 「玄奘三蔵」(岩波新書)

「アラビアの医術」(中公新書)

「イスラム世界」(河出書房)

「東西文化交流の諸相」(慶応義塾大学内同書刊行会)

「シルクロードの秘密国」(芙蓉書房)

その他

NHKブックスジュニア 9

検印廃止

草原に輝く星

定価 580円

昭和48年5月25日 第1刷発行

著 者 前 嶋 信 次

発行者 浅 沼 博

印刷 凸 版 印 刷

製本 凸 版 印 刷

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号 150 振替東京 49701

8322-014009-6023 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

草原に輝く星

目次

はじめに……………七

第一章 オノンのほとり

「黄金のつぼ」から生まれた娘たち……………一七

青い狼の子孫……………二四

捕われの身となって……………三四

第二章 追跡行

タルバガンと草原の馬……………四三

奪いかえし……………四八

第三章 明暗こもこも

再会……………五三

あかつききしゅう
暁の奇襲……………六〇

幼き日の友……………六七

不意のわかれ……………七六

第四章 延びゆくもの

オールドウに住んで……………八三

おごるもの……………八七

ジュルキン族の滅亡……………九一

第五章 暴風雨

ジャムカの即位……………九七

長かった夜……………一〇二

第六章 興安嶺のふもとで

きびしい軍律……………一〇九

間一髪……………一一三

第七章 追うもの、逃げるもの

疑うところ……………一一七

名馬のいななき……………一二三

深夜の注進……………一三二

獅子のごとく戦う……………一三七

第八章 泥水の誓い

夜が明けて……………一四三

最後の十九人……………一四九

第九章 大草原の統一

生首なまくびの笑い……………一五九

かがり火戦法……………一六四

巨鳥のはばたき……………一七五

あとがき……………一八七

表紙撮影 三宅 修

装幀 蟹江 征治

さし絵 枝常 弘

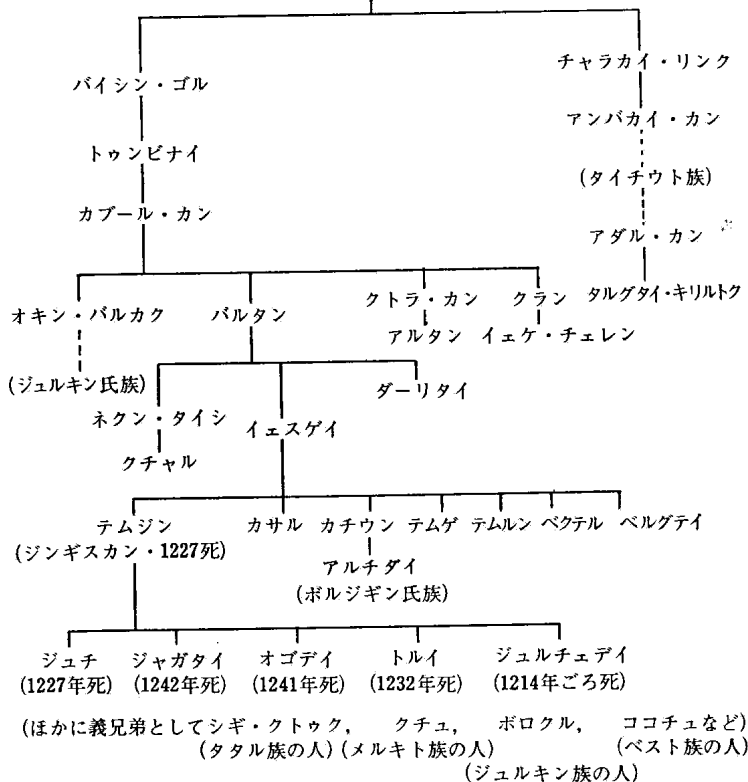
青い狼＝白い鹿(妻)
(9世紀初めごろ)

第12代

ドブン・メルゲン＝アラン・コア(妻)

第13代 ボンチャル

第17代 カイドゥ・カン



ジンギスカンの一族

はじめに

大きな川の流れる所には、ひろびろとした平野がひらけている。そのような所が、たまたま暖かい氣候にめぐまれると、そこに住みついた民は農業をいとなみ、村をつくり、町をつくつて、他の地方にさがけて高い文明を發達させることが出来た。もしも、いまから約二千五百年ほど前のユーラシア大陸をながめ渡すことが出来たならば、きわだって高い文明に飾られた四つの地方があることに目をひかれたにちがいない。

その一つは西アジアからアフリカの東北部にかけてで、ユーフラテス・ティグリスという二子川とナイル川が流れており、それらの岸边には世界最古の文明が栄えていた。もう一つはインドの北部で、インダス川やガンジス川が流れ、その岸边にもまた高度の文明が見られた。第三は中国の黄河流域で、漢族の立派な文明が發達しつつあった。第四は地中海の東部エーゲ海の中の島々や、この海にのぞむギリシアや小アジアなどであるが、さして大きな川はないけれども、明るい太陽と輝くような海があった。

田畑を耕し、村や町に住む人たちは、それぞれの故郷を愛し、生まれてから死ぬまでそこを動かないものが多かった。生活にめぐまれていればいるほど、その土地にひきつけられ、他国

に行くのをいやがるのである。自分たちの土地を守るために、長い城壁をつくって、国境を固めたり、町のぐるりを囲んで敵を防げるようにしたりするのであった。

けれど、太陽と水、そして広々とつらなる肥えた大地など、いろいろな天のめぐみを楽しむことの出来る人々は当時の人類のほんの一部であった。あれはたつた砂漠で、わずかな地下水にたよってやっと生きていかねばならぬ砂漠の民もいたし、耕作するだけの水がなく、家畜をつれて水や草をもとめて移動の生活を続けなくてはならぬ草原の民もあったのである。ユーラシア大陸を東から西に貫くようにして、帯のようにつらなる大草原地帯がある。ごく大まかに言うと北緯四十度から同五十度に至る間であるが、それから、もっと北方は大森林地帯であり、狩猟をおもな仕事とする森の民の世界であった。

草原地帯をステップなどとも呼ぶが、この地帯に住む遊牧の民は馬や牛、羊やラクダなどを飼ひ、冬はなるべく低い所か、南の方に移り、夏は高い所か、北の方へと動きながら暮らすのがならわしで、農耕の民が同じ所で一生をすごすのとはちがっていた。昔の中国の人たちは、これら遊牧の民の建てた国家のことを「行国」と呼んだが、これは一つの場所に定着せず、都会などもつくらずに、いつも動いている国という意味であった。

遊牧の民は誇り高く、きびしい大自然の中できたえあげられつつ育った人たちである。日常生活やものの考え方なども、文明世界の人たちとは大幅にちがっていた。衣食住をはじめ、

善惡の標準なども、ずいぶん差があるのである。十四世紀の中ごろ、モロッコ生まれの大旅行家イブン・バットゥータはサハラ砂漠を越えて南のかたニジェール川の上流にあった黒人王国を訪れた。その都に滞在していると、もっと奥地から人食い人種の使者たちが貢物みつぎものをもってやって来た。この人々の住んでいるあたりには黄金がたくさんあるので、黒人国の王様もその使者をたいせつにし、おくりものとして侍女を与えた。すると、食人種の使者たちは、さっそくにその侍女を食べてしまい、その血を顔や手に塗り、王様の所へお礼を言いに来たそうである。この話はイブン・バットゥータがその旅行記中で伝えたことで信用出来るのであるが、その人たちはつまりそうして王様からもらった侍女を食べてしまうことを礼儀正しいやり方と想っていたらしいのである。時代や場所が変わると、現代の人たちから見ると驚くほかはないような野蛮な行爲が、かえって立派なことのように考えられていた場合もあるのである。

この本の中に記されているのは、十二世紀から十三世紀にかけてのモンゴリア大草原の民の生活である。眉をひそめさせるような荒々しいふるまいもあれば、現代の人々でも、及びもつかぬほど立派な行爲も見られることであろう。

ジンギスカンに始まるモンゴル帝国は史上空前の大規模のものであった。その精力的な騎兵団は、北はシベリアの森林から、南はインドの西北部、ビルマ、ベトナムなどにまではいり、その船隊は日本やジャワなどにも攻めよせた。中国全土も約九十年間にわたってモンゴル人の

支配の下にあったし、いまのイランやイラク地方も同様であった。これまで多くの国境でへだてられて、直接に交通することはなかったヨーロッパ人と東アジアの人とが、有史以来はじめて行き来するようになったのも同帝国が出現したためである。そればかりではなく、この広大な大帝国の治安はよく保たれ、ペルシアのある歴史家のことばによると「かよわい一人の少女が、頭に黄金の皿をのせて、この帝国の端から端まで旅をしても、何の危険もなかった」と言っているほどであった。ただこのようなよい時代はそう長くは続かず、間もなく、国家はいくつかに割れてしまい、それも一つまた一つと滅んでしまった。けれど、その流れをひく国はそちこちに残り、二十世紀まで及んだものさえあった。

大昔から、アジア大陸の草原地帯に住む遊牧の民の間からは、ときどき、実に規模の雄大な人物が現われ、それらを中心として、短時日の間に大国家がつくられるのであった。あたかも地平線に浮かんだひとかたまりの雲がみるみるうちにひろがって大空をおおい、風を起こし、雨をそそぎ、やがてまたカラリと晴れわたるように、これら草原の帝国は次から次へと興^{おこ}っては滅び、興っては滅びしてきたのである。

遊牧の民は賢くて勇敢だったが、文字とはあまり親しまず、これら草原の英雄たちや、多くの国家のことで、かれら自身が筆をとって書き残したものはごく少ない。これらと何かの関係があった定住民族が、たまたまかれらのことについて書き記したものの方がずっと多いのであ

る。草原に生まれて、立派な事業を成しとげた人々で、まったくわすれられてしまったものは無数にあったであろう。武人や政治家ばかりでなく、すばらしい詩人たち、困った人たちを慈愛のほほえみで救った女性たち、わすれられぬ興味ある物語で人々を楽しませた人たち、そのような人々のことも、何の記録も残さずわすれられてしまったのである。それは荒涼としていた大草原をにわかに香り高い花園に変える初夏の微風にも似ていた。しかし、やがてまたもとの荒涼の荒野にもどってしまう。草原はまた忘却の世界でもあったのである。

ジンギスカンについては、決してそうではなかった。かれが世を去ってから間もないころ、モンゴル語で書かれた珍しい文献が残っている。その名を「モンゴルウン・ニウチャ・トブチャアン」(モンゴルの秘密な歴史)と言うが、中国では「元朝秘史」と呼ばれている。元朝はジンギスカンが世を去った一二二七年から三十年あまりたったから、その孫のクビライが始めた国号であるから、この名はちょっとずれているようである。けれど、この本は元朝をはじめ、ジンギスカンの子孫たちが建てた多くの王国の宮廷では宝物としてあつかわれ、一般の人たちが見ることは出来にくいものであった。ことば通り「秘史」として尊ばれていたのである。けれど、最初に書かれたままのものは残っていないから、これがはじめの文字で書かれたかということについても三つの学説にわかれていのである。つまり中央アジアに住むウイグル族の文字だったという説と、バズバ文字説、それからモンゴル語の音をそのままに漢字で

写したものであろうという説なのである。

この本はのちに中国語に翻訳された。いつごろ訳されたかということについても、いろいろの説がある。元時代の中ごろで、十四世紀のはじめにちがいないと主張した人もあるが、多くの学者は、それよりも百年近くあと、明時代（みん）になって、十四世紀末のことであろうと言っている。ヨーロッパにこの本のことを伝えたのはロシアのパラディイ（パラディウス）主教で、中国語訳文からロシア語に翻訳したが、それは一八六六年のことであった。その次は、わが国の那珂通世博士（なかにちよ）で、五十歳をすぎてから、この本を訳すためにモンゴル語やロシア語などまで学んで、これを全訳し「成吉思汗実録」と名づけた。それは明治四十（一九〇七）年のことであった。この本は日本の東洋史学界が世界に送った名著の一つとしてたたえられている。そのあとドイツのヘーニシュ博士のドイツ語訳（一九三七年）をはじめ、ソ連、フランス、アメリカその他いろいろな国の学者たちが、この書の研究や翻訳を行ってきた。日本語への新しい訳も、その後、小林高四郎博士（「蒙古の秘史」昭和十六年）、村上正二教授（「モンゴル秘史」昭和四五―四七年、未完）などが出ている。わたくしのこの本もまたこれらの書のおかげによるところが多いのである。

ジンギスカンの伝記で、ことにその幼少年時代のこと、その先祖の伝説などについて、この「モンゴルの秘史」ほど詳しいものはない。イスラム教の聖典「コーラン」はアラビア語で書

かれた最初の本であるが「モンゴルの秘史」はモンゴル語で書かれた最初の本である。那珂博士はこれを「モンゴルの古事記」にたとえ、ソ連の学者ウラジミールツォフは「草原のいに満ちた英雄史談」と評した。村上教授は、モンゴル民族統一の業をなしとげた英雄ジンギスカンの生涯を中心に、モンゴル帝国成立の歴史を物語った歴史文学だと言ってもよいであろうという意味のことを言われている。

このように、この秘史はいまでは世界の古典の一つとして高い評価を受けているのであるが、さて誰が著わしたものか、それがはっきりわからない。六十年ほど前にある学者が、ジンギスカンと同時代のウイグルの人タタトニアが書いたものであろうという意見を發表したことがあるが、たしかな証拠はない。それにしても、ほぼこれと同時代の人で、当時のことを親しく見たり、聞いたたりした人が書いたものであることはたしかで、中には一二二七年、つまり、ジンギスカンが甘肅省の六盤山のほとりで病死したその次の年に書かれたものであろうという説を示した学者もいる。

この秘史は歴史書というよりも、一篇の文学作品であるなどと言うものもあるほどに、美しい詩や文章から成っている。けれどもなんといっても第一にこの本は歴史書である。ジンギスカンという大草原の生んだ不思議な人物は、この本の中で永遠に生きているのであり、名の知れぬその著者も自分がこの英雄について知っているとを忠実に伝えようとして書いたもの

にちがいないのである。それゆえに、ジンギスカンの子孫たちも、この本を宝物としていつくしみ秘蔵したのであらう。

数年前、わたくしはソ連に旅し、モスクワでの早春の一夜、ボリショイ・オペラを見たが、出しものはプーシュキン原作の「バフチサライの泉」であった。原作はクリミア地方で長く続いたモンゴルのギラーイ王朝の哀史を歌ったものである。プーシュキンは黒海地方への旅で、同王朝の都の廢墟を訪れ、感興の湧くがままにこの作品を書いたと言われている。その昔のたくましいモンゴルのカン（王）や美しい妃たちなどの嘆きやよろこびなどが、次から次へと展開し、いつか心は舞台の中に引きこまれていくように感じた。そのあと、飛行機で黒海の岸辺まで行った。三月末であったが、モスクワのきびしい寒さにひきかえて、そのあたりはもうすっかり春めいており、スモモかなにかの白い花が一面に咲き乱れ、細かい雨に煙っていた。暗い雲の低くたれた黒海の水をながめて、ギラーイ王朝の昔などをしのんだが、かれらもまたジンギスカンの子孫だったのである。

さらにカスピ海やアラル海の上を越えて中央アジアに行き、サマルカンドやブハラなどの古都を見物した。このような旅が刺激となって、わたくしは昨年「シルクロードの秘密国―ブハラ」という本を書いた。これはブハラを都とし、数百年続いたブハラ汗国にブハラのネロとも呼ばれた暴君が現われて、ここを訪れた外国の人たちや、その国の民などを多数殺したことな